

LUDWING LEWISOHN

THE CASE OF MR. CRUMP

THE TYRANNY OF SEX

Translated by

SHIGERU TADOKORO

SHINCHOSHA

1962



クランプ氏 の妻の座

—性の暴虐—

ルーイゾン
田所 茂 訳

新潮社版

1962

The Case of Mr. Crump.
—The Tyranny of Sex—
by

Ludwing Lewison

Original English Language Edition published by Farrar, Straus
and Cudahy, Inc.

Copyrighted in U. S. A. by Farrar, Straus and Cudahy, Inc.
Japanese Translation right arranged through C. E. Tuttle.

クランプ氏の妻の座

一九六二年一月二六日 印刷
一九六二年一月三〇日 発行

定価四五〇円

訳者 田所 茂

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一
電話東京(三四一)七一
一八番 振替 東京八〇八番

(乱丁・落丁本はお
取替えます)

〈検印廃止〉

目次

まえがき	2
第一章 アンのおいたち	5
第二章 ハーバートのおいたち	29
第三章 破局	61
第四章 新婚当時	116
第五章 その後のこと	168
第六章 危機来る	213
第七章 正義は裁く	252
あとがき	278

The Case of Mr. Crump.
—The Tyranny of Sex—
by

Ludwing Lewison

Original English Language Edition published by Farrar, Straus
and Cudahy, Inc.

Copyrighted in U. S. A. by Farrar, Straus and Cudahy, Inc.
Japanese Translation right arranged through C. E. Tuttle.

クランプ氏の妻の座

シグネット版のためのまゑがき

わたしは旧著「クランプ氏の場合」を短縮し、効果を強化して、この版を作製した。これによって、この物語は一そう強烈に、じかに読者に訴えるものと思う。この物語がおおくの人に、とくに現在の若い人に読まれれば、幸いである。わたしは、読者がこの書を娯楽読物としておおいに楽しむと共に、この書の持つ意味を見落とすことのないよう切望する。

ラッドウィグ・ルーズン

第一章 アンのおいたち

1

クランプ夫人の好みの話題と言えば、自分の実家の運命とか母の生涯、彼女自身の子供のころのことであつたが、そんな話はそういつもするというわけではなかつた。話をする時刻は静かでなければならなかつたし、また彼女の考えでは、子供たちが、安全に寝こんでいなければならなかつた。そんな場合、ことに夕食の後など、クランプ夫人は、よく、膝の上に手を置き、低い安楽椅子に腰をおろして、おもしろい出話をはじめののだつた。そんなとき彼女はいつも眼鏡をはずし、それを本の上にのせたものだ。まತ್ತたくこの眼鏡は彼女の小さな肉付きのよい鼻柱にめつたにじつと落ち着いてゐることがなかつた。こうした時刻は、彼女のきまり、文句でいうと、『ちよつと一服』の時だつた。彼女は『ヘンナ染め』が十分染まっていらない髪を朝からまだ手入れもせずに、頭のてつぺんにむぞうさに小さく束ねてゐた。彼女はいつも少しよこれた、なるべく黄色い色の着物を着てゐた。彼女の灰色の眼をよぎる一抹の物静けさ、ときには物悲しい過去をしのぶ思いが、先の急にふくらんだ鼻やしぶとい、あごの線をやわらげてゐた。

こんな時刻には、とくに彼女は後年一緒にゐる時、ハーバート・クランプに對してとてもやさしいようであつた。彼女の思ひ出の世界は、彼に親しみはないものの、興味の無い世界ではなかつた。彼は彼女の二回目の夫であり、約二十歳年下だつた。彼女の連れ子のまぎれもない年齢をはじめと

して、幾多の反駁^{はんぱく}しようもない証拠があるにもかかわらず、この事実を克蘭プ夫人は認めようとはしなかった。彼女は克蘭プ氏より九歳上だと言い張った。

人工的な光のもとで、イヴニング・ドレスを着、体がよく休まってメイキャップもますぐないようなときに、彼女はだし抜けに大声でこのど外れた数字を言い張るのだった。

こんなときには、それはまんざら信じられないこともなかった。彼女はこんな瞬間を利用し、たくわえ、積み重ねて行つた。それはあたかも、いつかその積み重ねた証拠をひき上げて、世間に立ち向かうとしてゐるかのようだった。夕食後の家庭的気分、静けさ、思い出のうちに、こうした厚顔無恥^{こうがんむち}な言葉が彼女の口から無意識に出て来た。彼女は年月の数字を口に出さなかった。とはいへそれは慎重さを期するためではなかった。数字に関係のあることはただ一事を除いて、すべて彼女の心のなかでは、あいまいとなるのも当然であつた。彼女の話は彼女一流の、厚みのある、強烈な、記憶の世界から出てきたものだった。

相も変らず、得々と克蘭プ夫人は母がたの里に当るケンタッキー州フランクフォルトのブロンズン家先祖代々のことを物語つた。ブロンズン家は彼女のいうところによると、その町の名門であつた。「ブロンズン家と、ハワード家と、ジャックスン家があつたのよ。」と彼女はよく言つたものだった。それは、さつま芋や林檎の大箱をいくつも蓄えた、広大な、旧式な、南部の家で、そこには羊の牧場があつた。祖父母のことは不明だった。彼女の話のここかしこにギノー少佐という名が出て来たが、彼は絵のような過去から抜け出して来た南部人で、ビーバーの山高帽の下から長い白髪がはみ出し、時代遅れの、白い革衿^{かり}巻と、絹のチョッキを着ていた。経済問題に関しても、克蘭プ夫人はあいまいだった。彼女の祖父はダムや堤防に関係のある仕事をしていた。オハイオ河や

ミシシッピ河の舟のことさえ口にした。具体的な事實は、克蘭プ夫人の母の代になって家運が傾いたこと（これは彼女も認めた）からはじめた。『南北戦役』後は文なしであった。彼女は『戦役』と言う言葉をつとめて気取らないように発音した。ブロンスン家の子供達は大学へは行けなかった。ジョシュア・ブロンスンはシカゴへ出て、看板描き、壁紙張りになった。気の毒なアンソニー小父はとくに不運だった。子供のころ、隣家の葡萄を盗もうとして木にのほりかけて落ち、克蘭プ夫人の話では、あまりにも深く針金で脚を切ったので、切断しなければならなかったことである。

その後、アンソニー小父は木製の義足をはめ、失望のあまり、酒を飲みはじめた。彼は、一八六〇年代の中ごろ、ぶらりとシカゴに出かけ、ある洗濯女の薄のろ娘と結婚し、二女をもうけた。姉のルウは低能で、十六歳にならぬうちに売春婦になった。妹のジョウジーは一九〇八年のある日まで、克蘭プ夫人が「可愛い小ぢやなジョージーちゃん——なんてきれいな娘でしょう。」と言っていたが、その『ある日』以後は「あのど淫売め」と呼ぶようになった。克蘭プ夫人は彼女の母を盲目的に崇拝していた。彼女は一八六〇年ごろにとった銀板写真をしまっていたが、それはすんなりした、若い、婦人で、黒い絹のボンネットをかぶり、きちんと身に合った胴衣、ゆつたりとフレアのついた硬織のベチコートの上に黒い絹のガウンを羽織っていた。長目の瓜実顔で、目は大きく、憂いを帯びているが、きりつとしていた。額は不自然なくらいに高く、狭く、鐘状で、そのためブロンスン家の女は皆子供のころから年寄りくさい感じがするので、注意深く額をかくしていた。母の性格については、克蘭プ夫人はその時々、二様の矛盾する説明をしていた。「かわいそうに、ママは気のやさしい従順な人だから、いつも自分の正しいと思うことをしていたわ。それ

なのに、これ以上不運な人がいるって、聞いたことがあって？」ところがまた、「いつもまけているのは私の方で、母は鋼鉄のような意志をもっていたわ。母はいつも私にこう言ったものよ。『アン、お前は男に甘すぎるよ。女性としての威厳なんて少しも持ってやしないんだからね』ですって。」ハーバート・クランプは晩年のトゥーイー夫人の人柄を知っていた。だから彼はこの違った二つの報告を理解することができなかった。そしてまた、姑しやうとめの若いころの話も、その理解には、何ら役立たなかった。

その話というのは実に悲しい、きたならしい、ものだった。母のアン・ブロンズンは十六歳の時に、ミシシピ河の蒸汽船の船長のサイラスという男に嫁いでいった。それは一八六〇年で、ハーバート・クランプの父が生まれる十年前のことであった。サイラスはあの荒くれ時代の酒乱癖のあるむつり屋で若妻に梅毒をうつした。彼は、妻が妊娠しているのを知っているが、ようしゃなく彼女の腹をけた。彼女はフランクフォルトのブロンズン家に逃げ帰り、サイラスのことはそれっきりで消息がとだえた。その後の十二年間のできごとについては、クランプ夫人は何も話さなかった。

母の物語に父が登場するくだりで、クランプ夫人はちよつとしたロマンスを披露した。父はファレルという英国人だった。ファレル家は、ノルマンの英国征服以前から英国に住んでおり、ジョン・ファレルは、ノーウィッチ伯の娘に勧められてアゲベモン派に改宗していた。クランプ夫人は、この二人の関係について彼女独特の見解を持っていた。彼は六十年代早々、フランクフォルトに現われ、背は高く、顔立ちが良く、英国風で、まだそんな年でもないのに髪もひげも白くなっていた。彼はニュー・オルリーアンズで黄熱病かうねつびょうにかかり、そのため、こんな風になってしまった

のである。厳密に言つて、彼の職業が何であるか、克蘭プ夫人は知らなかった。彼は常に金をもうけ、惜しげもなく使つた。アン・ブロンスンがファレルにサイラスの話をしたか、どうかは、分らない。彼女とファレルが、ブロンスン家ではなく、ギノー少佐の家で結婚したのには、おそらく何かわけがあつたのだろう。その後、すぐに二人は英国へ立つた。

2

正式に結婚したか、どうかは、ともかくとして、ファレル夫妻は一時英国に落ち着いた。そして一八六二年の初めごろ、その地のサリー側の産院で、アン・ブロンスン・ファレル、すなわち、後のアン・ブロンスン・ファレル・ヴァイラス・克蘭プが生まれた。

ファレル一家は四年間英国にとどまつた。ファレル・トウーイー夫人は英国が好きで、英国での四年間が彼女の生涯で最も幸福な時期だったと、いつだったか、心から言つたことがあつた。アンにとっては、この時期はむろん、一つの空白であつた。彼女の若き日の思い出は、フランクフォルトのブロンスン家のこと、その地での母と彼女自身のこと。また、母のつらい涙のことであつた。と言うのは、ジョン・ファレルは歸つて来ず、彼女自身が今度は一子を抱え、再び親戚の情にすがらなければならなかつたから。

ジョン・ファレルは、間歇的^{かんかくてき}に何回か現われたようであつた。いつも温和で、気前よく、むしろさつそうとしていたが、決して妻といつしよにならうとする気持はしめさなかつた。しかし、アンが六歳のころ、ファレルは突然母と彼女をニュー・ヨークへ連れて行つた。しかし、やがてニュー・ヨークで、グレニツチ街のとあるパン屋の二階の貸し間に、またもや——そして永久に——妻

を遺棄し、子供をさらつて、ニュー・ヨーク州奥地のシェイカー教徒の部落に預けた。ファレル夫
人が、あわれにも氣違ひのようになったのも無理はなかった。アン・クランプの言うところによ
ると、彼女は絶望的な、ひどい憂うつ症にかかり、氣違ひと間違えられて、ブラックウエル島の公立
精神病院に移され、その病院で首をつろうとした。「お母さんたらかわいそうに！ あなた、こん
な話を聞いたことがあつて？ でも幸いに、アンドロ・ストーン・スチーブンソンという、とても
お金持の、有名な、ニュー・ヨークの男に愛されるようになったわ。それでその人は母に、離婚して
自分と結婚してくれるようにといったのよ。でもむろん、母は、そんなことしようとはしなかつた
わ。」とクランプ夫人は、ひそひそ言つたものだった。このところでハーバートは、ファレ
ル夫妻の結婚は、なんら法律上の手続きをへていなかったから、今さら、離婚の手續きの取りよう
もないという、分りきつた説明を加えたい氣持を抑えることができなかった。だが、彼は、アンに
話を続けさせた。「ほんとうよ。お母さんはいつも、心の清い人でしたわ。わたし、今までにこん
な貞女見たこともないくらいよ。ともかく、スチーブンソンの助力で、彼女は、ブラックフェル島
から出て、やつとわたしを見つけたのよ。お母さんもまた、彼を愛していたわ。でも、彼女に
は、氣高い義務觀念があつたの。だから、わたしを連れてフランクフォルトへ歸つたのよ。」

その後、二、三年間、ファレルは子供のために衣類と金を送つた。子供はケンタッキー州のヘイガ
ービルで幼女や、若い娘たちの学校に入れられていたのである。が、急に、ファレルからの金がと
だえた。ジョン・ファレルが、そのときもまた、それから後も、たびたび、結婚したことはずつと
後にふとしたことで分つた。かわいいアン・ファレルは、ヘイガービルの楽しい学校をやめなけれ
ばならなかつた。そして、フランクフォルトへ歸つて来てみると、母が困窮した里の家で、冷遇さ

れ、あく、せく、していた。子供は母の寄食と不幸を痛切に感じとり、母が受けている輕蔑けいべつと屈辱くつじやくに氣付いた。そして、シカゴへ出かけようという、母の計画を子供らしい熱意で受け容れた。シカゴでは当時アンソニー・ブロンスンが一家をかまえていた。その家には、アンアンの祖母のブロンスンの妹に当るエフィー小母さんおはなさんもいっしょに住んでいた。この人は、もとフィラデルフィア市のマックフアーターとかいう医師のもとに再婚していた。あわれなアン・ファレルと父ていなし子に、シカゴに住むの地を求めるように、手紙で勧めてやったのは、全くこの小母エフィー・マックフアーターだったのだ。

克蘭プ夫人は、母といっしょに出かけた一八七二、三年ごろの、シカゴの模様もようをどうしてもはつきりと言わなかった。にもかかわらず、ハーバート・克蘭プには、あの愛想のない木造の小屋が、はてしもなく立ちならんだ平たい街路が、目に見えるような氣がしたし、粗野な肉感的ふんいき、声を張り上げて唱えるお題目、酒臭いにおい、人々のざわめきなどが聞こえて来るような氣がした。彼は、アンアンの最も率直な二、三の逸話を、きわめてはつきりと眼の前に描くことができた。たとえば、牧師、兼、藏医者のカミラス・ビー・キンゼーに関する逸話であつた。この人は、カラーを着け、長靴をはき、フロックコートを着て、娼婦しょうぶの寝台から起き上つて、はなやかな演説えんせつ口調で、「ルイザよ、これこそ人生のは、なだ。」といったものだった。

3

マックフアーター一家は、さびれた大通りの、さびれた、大きな、木造の家に住んでいた。家は、家具のそなえつけがとほしく、とくに、二階や寝台のある階では、どの家具も始終、位置が変

えられていた。妙な人々がひっきりなしに出入りしていた。その中には色あせた喪服を着た肥満した未亡人とか、青白いニキビだらけの顔をした口ひげの濃い男などがいた。マックファーター医師は、菜食主義、自由恋愛主義、磁気療法や、同胞愛を信じていた。この家に入入りする人は、患者とか、同じ主義思想を抱く人たちであり、だれも、宿泊、食事、治療を請求されたことはなかった。マックファーターは、フィラデルフィアの自分の家から、少額の仕送りをうけていたし、妻はデイトン市(註・オハイオ州の町)の先夫の子供たちから、月々百ドルもらっていた。彼の欠点は何であるにせよ、『先生』は、世間体を気にせぬ人であった。ねずみ色のビーバーの山高帽をかぶり、その下に、長い不揃いの髪が、はみだし、みすほらしいフロックコートを身にまとい、大きな市場かごをさげて、出て行く姿が毎朝みかけられた。彼は、野菜や、かび臭いパンを買いに行くのだった。ひよろ長い、やせた体が前かがみになっており、鼻は、世の中をかき分け、その価値を測定するためにつき出しているといった風であった。

一時間後、朝食に十一人の人々がならんだ。そこへ新来の客が加わった。涙ぐんだ若い夫人だった。先生は、彼女をとらえて、ひしと抱きしめた。「ね、えちゃん、浮気をせずに、僕を待っていてくれた？」すると、その孤独の女はすすり泣きをした。先生の小さなねずみ色の眼に、挑戦的な光がひらめいた。「そうらねえ！ あんたに必要なことは、極性の切り変えだよ。陽極に切り変えなさい。このお転婆さん！ そう、それでよろしい。」「そうつとしておいておあげなさいよ、先生。ご主人を亡くしたばかりなんですから」と、マックファーター夫人が口をはさんだ。「エフィー、そりゃあ分つてるよ。」実際、彼は案外、かんがよかった。

「ほくが、彼女に極性の切り変えをしてやろうというのは、そのためなんだ。」極性の切り変え、

——陽性をだすこと——これは、先生の万能療法であつた。彼のいうところによると、いつだったか彼は、長年、中風をわずらつていた人の病床をたずね、その患者と、その人の母の里の人々を三代にわたつて、最も口汚くののしつたそうだとする。するとその男は、陽性に切り變えて、部屋から出て行つた。「陽性にしていたまえ。ぼくなんかは、自分の葬式のときにも一暴れやるつもりだ。」と元氣いっぱい、先生は、叫んだものだつた。その後、マックファーターは、た、ん、か、を切つた通りのことをやつたという逸話がある。彼を乗せていた霊柩車の輪がはずれて、棺が割れ、死んだ彼のうすい唇がひん曲つて、狂暴な皮肉な笑ひを見せたというのである。

世間では、この小さな、小ぎれいな、見るからに上品なエフィー・マックファーターが、どうしてこの医者と結婚したのか、また、彼の奇矯と粗野をどうして我慢しておれるのかと、ふしぎがつた。デイトン市にゐる彼女の息子たちは、この結婚をひどく遺憾に思ひ、エフィー小母さんがマックファーター医師と別れずに我慢しているのは——ここところを話すとき、クラブ夫人は、何時も声を落した——まさしく息子たちの世間体と、心の平和のためを思っているからこそだつた。彼はデイトンで彼女を知り、彼女の家のまわりをうろつた。彼は、彼女と美貌の混血の馭者との紛れもない場面に出くわした。それは一八六八年のことだつた。かわいそうに、エフィー・ロッシユは、マックファーターの奴隷となつた。彼女は彼と結婚し、耐えていかなければならなかつた。

マックファーターの家は、どつちみち、だれも支払いをしない一種の宿であつたから、エフィー・マックファーターが、姪とその子を招いて、その款待にあずからしめることは、至極容易であつた。姪たちは、部屋と、かび臭いパンと、豆と、野菜の分け前を与えられた。先生は、このませた娘が好きになつて、彼女に話しかけたり、『糧秣の徴発』に彼女を連れていったりした。ファレル

夫人とマックフアーターとの間に、急に不和がもち上った。医者は、極性を切り変えるのだといって娘にやたらにみだらなまねをしたので、娘は彼の頬を打った。その結果、母と娘は、時々、アンソニー・ブロンソンの家にしばらく避難しなければならなくなった。しかし、アンソニーの家族は、路地の三つの狭い部屋に住んでいた。リディア・ブロンソンは、洗濯物の貸洗いをしていた。

——このことは、克蘭プ夫人が、あらゆる話のうち、最も口汚く輕蔑し、公然と、恥じながら、話した数少ない事柄のうちの一つであった。ルウは、アンよりも四つ年上だったが、早、秘かに出かけては、不良と逢びきしたりしていた。ジョージは、四歳で、ブロード毛の天使のような顔付きをした子供であったが、甲高い泣き声で他の者を圧倒した。アンソニー・ブロンソンは、相変らず、木製の義足で元氣もなく、始終、酒に浸っていた。エフィー小母さんは、再び和解した。マックフアーターは、過去のことを忘れており、寛容だった。そしてファレル母娘は、あのころもとない、おちつかぬ、隊商宿に引り返したのだった。彼らは、ほかにどうしようもなかった。金もなかったし、ファレル夫人には、生活の糧を得るような何の技能もなかった。その上、彼女は、神経痛と痔疾に悩んでいた。克蘭プ夫人は、いつも母の病弱と、事実上の無力をあたかも名譽のしるしでもあるかのように話した。こうした弱さは——ハーバート・克蘭プはよくこのことを思いおこしたものだ——必然的にただ一つの救済方法、すなわち男性への寄食に向かわせたのだった。マックフアーターのサークルにジョン・トゥーイーという男が現われた。ファレル夫人より十二歳若いこの男が、どんな点で彼女にひきつけられたかは、いつまでたってもわからない。アン・克蘭プに聞いてみても、聞くだけやばな話だろう。母または、彼女が夫に許す愛情が——たとい、しわ、貧困、無能、痔疾があるにもせよ——その貴重さにおいて、論議と批評を絶する贈り物であることは、彼